OPINION

日本生理学会の改革

前将来計画委員会委員長　松尾　　理

I　始めに

日本生理学会に将来計画委員会(以下本委員会)が設立され，改革への歩みを始めたのを機会に，今までの委員会の討論内容を総括し，会員諸先生からの学会発展のためのさらなる提案が出される事が本原稿の意図するところである．

委員会が設置される前に生理学会会則委員会熊田委員長が会員諸先生方に呼びかけられ，生理学会活性化の必要性を「将来計画に関する組織検討についてのたたき台」としてまとめられた．この時期にまた日本学術会議生理学研究連絡委員会が「生理学の動向と展望」と題して，生理学のあるべき姿，および問題点を広い視点からまとめられていた．

松尾が将来計画委員会の委員長に任命され，会員を構成する各層（年代，職位，性別，出身学部など）から幅広く人選を行い，第1回将来計画委員会を平成10年9月5日6日の2日間生理学研究所で開催した．

委員会の運営法として松尾は最近認められてきているナレッジマネジメントの方法を討論に取り入れると共に，当初は幅広い階層からの人選なので，アイスブレイキングに注視し，委員会の雰囲気が討論し易い状態（何を言っても恥ずかしいと感じない）になるよう，細心の注意を払った．アイスブレイキングには少々戸惑った委員もおられたが，この結果，以降の討論が非常に活発になったのは事実である．

松尾の委員長としての任期が終わったのを機会に，本委員会が討論し，提案してきた事を内容別に紹介する．

II　学会の組織・運営の在り方

この問題については委員会の度に議題として取り上げ，熱心に討論した．日本生理学会の活性化という大問題を解決する第一歩と位置づけたからである．

組織を構成する常任幹事会の幹事選出については既に昨年末から実施されているので，会員諸先生も変化に気づかれていると思う．主旨は常任幹事会の活性化と執行機関としての組織力の強化である．多様な人材を常任幹事として選出するため，定員の半数を2年毎に改選し，一度常任幹事になると一期休むという新ルールが総会で承認され，実施されたのである．常任幹事が単なる名誉職ではなく，日本生理学会のために時間とエネルギーを費やして頂く重責であるという認識を会員諸先生方に認識して頂くと，選出もスムースにいくであろう．

執行部として在京三幹事（庶務，編集，会計）が実務を取り仕切って来ていたが，学会の組織形態から見直し，強力な執行機関としての名称と役割について提言したが未だ実行されず，実際は旧三幹事体制のままであると言えよう．

常任幹事の特別枠として，選挙の結果を配慮して，選出されてない構成員について別途考慮する道筋も設け，多数の意見が反映されるようにした．今回はIUPS招致が正式に決まった事でもあり，その成功に向けて特別枠が利用されている．結果として，学会の継続性が当分保証されたと言えよう．

最近大学組織の改変により，講座名から生理学という名称が消えている例もあり，そこに着任した教授が生理学会会員でない場合には，その講座の若手会員の学会参加がしにくくなろう．そこで，

旧生理学講座を継承した講座の新任教授が会員でない場合，すぐ評議員になって貰い，生理学会での活動がし易くなるようにした．

事務局の強化について討論したが，新しく提言として委員会案を出すには至らなかった．しかし，IUPSの招致が決まっており，いずれ何か対策が必要であろうと思われる．

IUPS 2009に向けて組織委員会，プログラム委員会，財務委員会などが設置され，活動を始めている．日本生理学会の発展のためにIUPS 2009を旨く活用し，両者が相互に刺激し合って，IUPS学会が成功すると共に，生理学会の活性化が両立する方策を今後具体化していかねばならない．

III　教育関係について

今や生理学教育が重大な岐路に立たされていると言っても過言ではない．本委員会は第1回から第8回まで絶えず教育の事について討論し，まとまったものから順次常任委員会に報告していった．

一番大きな問題はモデルコアカリキュラムや統合カリキュラムの中で，生理学が埋没してしまい，学生の生理学に対する認識が非常に薄いものになってしまう事である．生理学教育の重要性を医学教育全体の中で，学生のみならず医学部の全教員に認識させる方策を講じる必要がある．

換言すれば，臓器別のコースが設定されたカリキュラムではカリキュラムの中に生理学の名を見出せず，学生にとっては単なる通過駅で列車を見送る駅員のような立場に生理学が見過ごされてしまう危険性がある．このような事態に対して，日本生理学会として，どう対応していくかを具体的に提言していかねばばらない．

本委員会では，生理学の教育について討論してきた．しかし教育委員会で具体化されたものは未だ無いのが現状である．討論の主な内容に次のようなものがある．

a）モデル講義の公開

教員が自分の研究領域に関係している事を講義するのは大変容易であるが，そうでない領域では準備から苦労しているのが現状である．講義のポイントを如何に上手くまとめるか？該当する領域の研究発展の歴史はどうであったか？何か学説が対立したような事は無かったか？研究に関しての失敗談や成功の秘訣などの小話が手に入ったか？画像として印象的なものは用意出来たか？自分の領域と同じ位，何も見ずに話を進められるか？学生に準備不足を見抜かれないかなど，多くの不安，心配事が講義内容以外に付いて廻る．これを打破する一つの方法として，生理学会の大会中にモデル講義をそれぞれの専門分野の人にして貰う．この場合，上記の問題が解決出来るようなスタイルにする事を予め注文をつけておく．これをビデオで撮り，後でゆっくり見直す手もある．医学以外の分野の人にも分かり易く講義して貰えば，大会に，医学系以外に，看護学系，栄養学系，体育学系など，他分野の人が多く参加するようになるであろう．そうなれば，教育から研究へと，参加者の関心を誘導すれば，生理学に携わる裾野は大変広くなろう．モデル講義を聞いた後で，講義の中味ではなく，講義方法について質疑応答すれば，参加者の満足度は高まろう．

b）サマースクール

大会での○○会場を三日間，教育関係でプログラムを編成する方が，夏休み中にカンズメになってサマースクールをやるよりも参加し易いと思う．しかし，サマースクールについては，既に他の学会が実施しているので全く不可能ではなかろう．

c）長期計画

問題は生理学という幅広い分野をカバーするには数年という長期計画を立てねばならないという事である．学問の発展の著しい分野は，短期間で再講義する必要があろう．

d）教育資質能力の開発プログラム

何れにしても，昔のような時間枠が取れない現状では，一回一回の講義を学生にとって，大変魅力的なものにする必要がある．そのために，学会

としても教育に力を入れて，会員の教育活動に貢献するシステムを作る必要がある．

e）生理学実習

実習についても種々討論した．大会中にデモンストレーションする案や，バーチャルな実習を企画運営する案など，様々な意見が出された．実習は学生が実体験する場なので，実習機器や実習教員などに制約があっても，それ以上に生理学の魅力を学生に伝達する場なので，学会としても良いサンプルを示すべきであろう．

f）基礎配属

基礎配慮を実施している場合，その成果を大会で発表し，優秀発表を表彰する案も討議された．この場合，医学部以外の学生は卒業実験・卒業論文を発表させれば，同様の事が出来る可能性も討論された．何れにしても，医学部以外の関係者を幅広く大会に参加させるのに，教育が共通のテーマである事は間違いない．教育委員会の活動に期待するところが非常に大きいのである．

IV　研究に関連する事項

研究に関係して，いわゆる科研費の審査についての風説が話題になったが，事実とは全く違う風説であり，この件はそれで終了した．一般論として，科研費が充分であるかを他の先進国と比較して，差が大きければ，学会として提言すべきであるとして討論を締めくくった．
現在の審査員の選出方法についても討論したが，科研費自体の配分方法や審査員選出方法が変わっているので，本委員会から提言したものの，後追い的な感が否めない．

研連の事も少し討論しただけで，特に報告する内容に至らなかった．

V　若手の会の復活

本委員会の第1回目で若手の会が復活（名称が同じだけで，中味は全く違うが）する方向に動いて貰う事にした．以降若手の会のシンポジウムが大会中に組まれており，また，若手の会主催のサマースクールが大盛況である事実から見て，日本生理学会は若手を多用すべきである事は間違いない．そのため，特別枠に若手の会からのメンバーを登用する提言をした．

ただ残念な事に若手の会も全国的なネットワークになっていない．若手が少ない現状から止むを得ないが，やはり全国の全ての大学に少なくともメンバーが1人は居る状況になって欲しいと本委員会は念願している．

この若手の会の活動に触発されたかのように，若手から教育技法をシェアするワーキンググループの設立と，具体的なon-line journalの提言があり，本委員会も全面的に支援する事にした．将来を先取りする形で動いている姿がこのグループに見られる．

関連して，女性研究者の会の事も討論し，本委員会として，女性研究者が大会に参加し易い環境を整備する提案を支持する事にした．

VI　まとめ

将来計画委員会の第1回から第8回を総まとめにして要点を列挙した．本委員会の設置の目的から言って日本生理学会の活性化への第一歩を踏み出したばかりであろう．常任幹事会や執行期間としての新しい体制の確立，そして日本生理学会という大きな組織を会員全体の英知を結集して，21世紀に大きく羽ばたく存在にしなければならない．特に「統合」を掲げた生理研連報告書が，「統合カリキュラムに生理学を埋没させている」危険性は無いのか注視しなければならない．学会誌がニュースレター的になっており，またJJPが生理学会員全員を「統合」していない現状は，今後の活性化の障害にならないように取り組まねばならないだろう．

最後に本委員会のメンバーの先生方（以下順不同）：岡田　泰伸（生理学研究所），金子　章道（慶應義塾大学），久保　義弘（東京都神経科学総合研究所），熊田　衛（聖路加看護大学），栗原敏（東京慈恵会医科大学），小泉　周（慶應義塾大学），少作　隆子（金沢大学），勢井　宏義（徳島大学），曽我部　正博（名古屋大学），高木　都

第1回将来計画委員会参加委員の集合写真

（奈良県立医科大学），高松　研（東邦大学），本間　研一（北海道大学），前田　信治（愛媛大学），水村　和枝（名古屋大学），森脇　晃義（岡山大学），宮下　保司（東京大学）の熱心な討論と数多くの提案に感謝申し上げます．特に岡田委員には会場の設営から運営まで大変御尽力頂いた事に厚く御礼申し上げる次第です．